

令和2年度 第2回さいたま市親の学習プログラム改訂協議会 議事録

1 開催日時

令和2年11月5日（木） 午後2時から午後4時まで

2 開催場所

生涯学習総合センター 7階 講座室1・2

3 出席者

〈委員：5名〉

- ① 森田 圭子 委員長
- ② 西川 正 副委員長
- ③ 田中 亜弓 委員
- ④ 丹野 春香 委員
- ⑤ 長谷川 広美 委員

〈事務局：12名〉

- | | | | |
|---|------------|------------|--------|
| ① | 生涯学習総合センター | 主幹兼事業・企画係長 | 有江 良修 |
| ② | 生涯学習総合センター | 事業・企画係主事 | 岡 有香 |
| ③ | 生涯学習総合センター | 社会教育指導員 | 伏見 浩美 |
| ④ | 生涯学習総合センター | 社会教育指導員 | 松本 みはる |
| ⑤ | 生涯学習振興課 | 課長補佐 | 荻原 唯史 |
| ⑥ | 指扇公民館 | 社会教育指導員 | 本山 洋美 |
| ⑦ | 馬宮公民館 | 館長 | 岩崎 まさみ |
| ⑧ | 内野公民館 | 社会教育指導員 | 成尾 千里 |
| ⑨ | 三橋公民館 | 社会教育指導員 | 安居 和子 |
| ⑩ | 大宮東公民館 | 社会教育指導員 | 伏見 怜奈 |
| ⑪ | 仲町公民館 | 社会教育指導員 | 最首 紀子 |
| ⑫ | 大古里公民館 | 社会教育指導員 | 小幡 賀子 |

4 協議事項

- (1) 改訂に係るアンケート結果について
- (2) 親の学習プログラム改訂の方針について
- (3) 改訂素案について

5 配布資料

- (1) 第2回さいたま市親の学習プログラム改訂協議会次第

- (2) 第2回さいたま市親の学習プログラム改訂協議会出席者名簿
- (3) 第2回さいたま市親の学習プログラム改訂協議会席次表
- (4) 【資料1】P3～P10 親の学習プログラム改訂の方針について（案）
- (5) 【資料2】ワーク修正一覧表
- (6) （参考資料1）アンケート意見まとめ
- (7) （参考資料2）ワーク使用回数
- (8) 変更点一覧

6 公開・非公開の別
公開

7 傍聴者の数
0名

8 協議内容

協議事項（1）改訂に係るアンケート結果について、【参考資料1】に基づき、生涯学習総合センターより説明。

森田委員長	参考資料2の説明はよいか。
岡事業・企画 係主事	参考資料2については、前回委員から依頼のあった、過去年度の累計について、参考として配布した。
森田委員長	平成29年度からの3年間でどれだけ開催されたかという資料。
岡事業・企画 係主事	1ページ目がプログラムの使用回数順、2ページ目がワーク順。

協議事項（2）親の学習プログラム改訂の方針について、【資料1】に基づき、生涯学習総合センターより説明、協議事項を検討。

森田委員長	<p>【資料1】は、修正一覧表に照らしながらご確認いただき、大筋のところでは質問があれば。プログラムの内容については、この後の議題で扱いたい。</p> <p>前回、市民ファシリテーターと協働する意味があるのではないかと確認をしたが、当初は協働という強い意味合いより、田代先生の手書かのような、市民主体の、市民が推進する生涯学習という方が強いということで、その部分が文章になっている。ファシリテーターの説明については、ファシリテーターが指導する人ではないということは強く書かれているが、何をやる人かということが</p>
-------	--

	<p>表現されていないので、そのあたりを書き込んだ内容にしている。後半の資料の削除については、各ワーク部分で検討していきたい。また、アイスブレイクを増やせば、講座の組み合わせパターンは、ちらしが何枚か、毎年更新されてしかるべきなので、事業報告書や別冊の毎年発行されるものに盛り込んでいくので、プログラムからは削除。</p>
西川副委員長	<p>親の学習は公民館でやらなくてはいけないものとして続けられているのか。</p>
岡事業・企画係主事	<p>はい。今年度は、区内公民館数×2回ずつです。</p>
西川副委員長	<p>それはどこで議論するのか。協議会はプログラム改訂だからここではないのか。</p> <p>仕事なのでやらなければいけないというプログラムを使って、何かを試みようかと努めている、やらなきゃいけないなら楽しくやりましょうというのが仕事だと思うが、前提は確認したい。</p>
有江主幹兼事業・企画係長	<p>親の学習事業自体は、本市総合振興計画の重点事業として定められており、事業計画は毎年度生涯学習総合センターから各公民館に示している。その中で、親の学習事業は今年度2回ずつ。</p>
西川副委員長	<p>前回の改訂では父親向けということが市の方針で決まり、今回の改訂では父親を外す理由は、市の方針が変わったからであるのか、あるいは、やりにくいからとか、あまり回数が行われていないからということなのか。</p>
有江主幹兼事業・企画係長	<p>実際、子育ては父親母親に限らないというところもあり、実情を踏まえて今回の修正となった。計画が変わったためというわけではない。</p>
西川副委員長	<p>捉え方によれば、父親向けは大変だからやらない、回数を減らす、となると、これがいらなくても読めてしまう。父親が子育てでどこまで関わっているかという視点は変わっていない。父親向けや回数というのは、誰が決めるのか。本来、最初から現場の公民館職員が自分たちで課題が何かを考えて、講座内容や回数を決めてやっていくべき。市の方針と現場とのせめぎ合いだから、正解がある話ではないが、整理をしておけるといい。</p>
有江主幹兼事業・企画係長	<p>整理をして検討する。</p>
西川副委員長	<p>やらせる側での修正ということになる。やらなければいけない、進めなければいけないとなると、本来父親がもっと関わるべきという視点で見れば、父親という視点を外して、すべての家庭に通じるように、ということ自体あまり意味がない。もう一つ、貧困家庭とかいろいろな家庭があるということであれば、それは本来ファシリ</p>

	<p>テーターがその場の安全をちゃんと確保するもの。この質問をすると今日の参加者だったら、すごく傷つくだろうと考えるのなら、その質問をしない、というように。</p> <p>例えば2分の1成人式とかやっているが、子どもによってはすごく危ない。そこは全員に通じるプログラムということで、少し違う視点で考える必要がある。</p>
森田委員長	<p>【資料1】『親の学習プログラム』改訂の視点の6番目、多様な家族というところ。</p>
丹野委員	<p>私たちが、どこに向かって議論していけばいいのか、ちょっとまだわからない。アンケートで出たのは、あくまでもアンケート意見で、アンケートで出たからといってそれを必ずしも反映させなければならないものではない。例えば子育ては母親がすべきだという意見が多く出たとして、それをもとにプログラムを改訂するのか、それはどうなのという意見が出る。どうなのというときに、どういうプログラムにしたいということをお話さなくてはいけないと思う。やっていけば、使いやすい、使いにくいという意見はあるが、全体的に、何のための改訂なのか、改訂の理念はなにか、わからない。前回の改訂なら、改訂に寄せての文章のなかに、特に父親向けに力入れたというポイントが示されている。改訂の柱は何なのか。</p>
森田委員長	<p>父親向けを意識したパパ応援というのが市の計画にあり、その目標指標の参加者満足度に対する努力も、現場はすごくされていて。公民館の性格上、平日の開催となると、どうしても女性参加が多い。父親だけと限定したプログラムではなく、父親にも母親にも使えるようなプログラムに変えていこうというのが、今回の改訂のポイントとして挙げられてくる。それが、「多様な家族のあり方を認め」という書き方だとすると、確かに少し距離感はあると思う。</p> <p>もう一つ、ワークをみると、短時間の中に展開がいくつもあり、十分に話す時間を確保できないという現場の意見は同感。時間の目安が書いてあるが、実際にプログラムにあてられる時間はその半分くらいで、すべての展開を入れるとすると、ほとんど話せないことが現実。話しやすく、発言しやすくという視点で、展開の段階を減らすとか、必要なワークシートはまとめるということも必要。今回の改訂の方向性としては、そういったことも含め、実際の現場から出る意見から、課題を解決したり、対象を融通できるようにしたりするところ。</p>
西川副委員長	<p>アンケートの意見とまとめの中で、現場のニーズは、親の学習プログラムで、おしゃべりのきっかけになるようなQを出すということ。</p>
長谷川委員	<p>現場の者としての意見だが、親の学習プログラムを初めて担当し</p>

	<p>た時は、堅苦しいネーミングに戸惑い、四苦八苦し。なので、みんなでおしゃべりしましょうよという文言を入れたり、公民館職員はいろいろ試行錯誤、チャレンジしていると思う。その中で、私は失敗だらけで、申込者数がゼロだったり、講座を再度組み直したり。数をこなさなければいけないという中で、講座を担当している感じ。隠そうとするのではないが、職員としても、どこかに人を多く集める方法がないか、と正直思ってしまう。ただ、1回、2回と数をこなして、1年、2年と成長しているのではないかと思える。</p> <p>その中で、やはり参加者は、おしゃべりしませんか、お友達作りませんか、という文言で目を向けてくれて、参加をしてくれるのではないか。今までの経験としては、自分が堅苦しい考えで担当してしまうと、伝わることも堅くなってしまうと思うし、親の学習という決められた文言は出さなければいけないが、その中で公民館職員はそれぞれ工夫をして講座にあたっていると思う。</p>
西川副委員長	親の学習というネーミングは改訂してはいけないのか。
森田委員長	「子育て応援パパ・ママおしゃべりプログラム」ではいけないか。
岡事業・企画係主事	「子育て応援パパ・ママおしゃべりプログラム」というのは、親の学習を行う際のワークを掲載した冊子の名称。
西川副委員長	自分が公民館職員だったら、親の学習と入れなければならないならば、すごく小さな字にする。チャンスがあつて変えられるなら、変えた方が良い。
森田委員長	「子育て応援パパ・ママおしゃべりプログラム」という言葉を使用できるようにする。
有江事業・企画係係長	市の方針として親の学習という名称が出ているが、実際の講座の中での運用の工夫を検討したい。
森田委員長	先ほど方針について説明をしたが、それを踏まえて、いかがか。
丹野委員	方針については、プログラムに関わってきた現場の皆さんの意見をいただきたい。
田中委員	<p>改訂の視点の中で、「参加者が発言しやすく主体的に学ぶことができる参加型のプログラム」を入れたのは、とてもいいことだと思う。講座をしていると、話せば話すほど参加者の満足度が高いということがあり、どれだけ話す時間をキープできるかというのが、ファシリテーターの力の見せどころ、話を引き出していく喜びになっていると思うので、入れていただき、良かった。</p> <p>また、「すべての保護者」というところで、既に多様な家庭、その家族の背景というのをいろいろと認めた上での文言であるので、あえて「多様な家族のあり方を認め」は入れなくても良いのではないか。今は、お父さんが男であるとも限らず、いろいろなこともあ</p>

	るので、「すべての保護者」という表現があれば十分ではないか。
長谷川委員	5番目の「他の子育て支援講座との親和性が高いプログラム」という文言の追加は、とても良いと思う。公民館職員としては、まず親の学習講座が最初の始まりの一步という感じで、公民館を知っていただき、そこから地域に出て行って、いろんな方々と触れ合うとか、次へ繋がる。
西川副委員長	これまでおしゃべりは、自主的に声をかけたり、かけられるみたいな感じでやっていたが、そんな関係性自体もできないという時代が、多分来ている。自覚すらしていないがそう思う人がたくさんいて、そこで、公民館に行ってみたら、というところから。
丹野委員	長谷川委員と田中委員に伺いたいですが、ワークの話したい裏には、どういう問題と、どんな学習ニーズがあると思うか。
長谷川委員	先月、0歳児の親の学習プログラムの講座企画をして、締め切りが終わってから、参加枠があったので、公民館にいらした赤ちゃん連れの方に参加の誘いをした。そしたら、回覧板で見て知っていたが、参加するきっかけがなかった。でも、声をかけてもらって、きっかけになったから参加する、ということがあった。ちょっと声をかけてみたというきっかけと、自分がもともと見ていたきっかけで、参加に繋がった。やはり皆さん、きっかけさえあれば、すごくしゃべりたい。特にコロナ禍でずっと外に出ていない状況もあり。講座は、始めははじめましての方が多いので静かでも、だんだんおしゃべりが始まり、最終的には時間が足りなくなって、ということがたくさんある。職員としても、おしゃべりできてよかったということがアンケートにでるとほっとする。足りなかったっていうと、じゃ、また次ねということに繋がられると思っている。だから私にとって親の学習は、きっかけと、おしゃべりに繋がるもの。
田中委員	私が思っているのは、主婦の人は特に評価されないということ。1日中働いても、一生懸命家事をやっても、ボーナスが出るわけではないし、特に評価されるものでもない。頑張っているのに、誰にも褒められないという気持ちとかが多分、私にも参加者にもある。話しているうちに頭の中を整理し、自分と同じ人もいるとか、そういう考え方もあるのだという発見の中から、自分は間違えていない、自分は頑張れている、という。だから私は、そういう発言があったときには、その言葉を拾って、素敵ですねとか、頑張ってるっしょいますねとか、声をかけさせてもらうようにしている。そうやって、話しながらまとめていく、自分を振り返るっていうのがあると思うので、親の学習でのおしゃべりがそういうきっかけになるというのもあるし、小さいお子さんを持つ人たちにとっては、不安と、どうしたらいいのかという判断が難しい中で、先輩ママや他のママ

	が声をかけるという場はプラスになると思うので、アンケートで「私だけではなかった」、「新しい発見があった」という言葉を見ると、この親学は、やっていい事業なのだ、ためになっているのだ、と思う。
森田委員長	きっかけという言葉は同感。正しい子育てのあり方の提示ではなく、ワークを通して自ら気づき、自ら学ぶきっかけとなるプログラム。2番目は、「話しやすく」とするか、「発言しやすく」や、「おしゃべりしやすく」か。「おしゃべりしやすく」で良いか。
西川副委員長	参加者が安心していうということも重要。安心して、ここだったら自分のことを話して大丈夫と感じているということ。「学習」という言葉が嫌だというのは、「学習」と聞いたとたん、自分は正しいかそうでないかをファシリテーターがジャッジするのではないかと思ってしまう危険があること。
森田委員長	「安心してやすく」とまでは書けないが、いつもファシリテーター養成講座の中で、「話しやすさって何だろう」という内容を行うので、「話しやすく」でどうか。「参加者が話しやすく、主体的に学ぶことができる参加型のプログラム」、「すべての親（保護者）が参加できるプログラム」と修正するというところでよろしいか。

協議事項（3）改訂素案について、【資料2】及び第1回配布【資料6】に基づき、生涯学習総合センターより説明、協議事項を検討

森田委員長	ワーク1からワーク5まで、ご質問やご意見を。
田中委員	親の学習ファシリテーターについての文言で、「～たり、～たり」と続くが、少し違う表現がいいと思う。ワーク3の「子育て今昔ものがたり」は、3歳児神話に抵抗を持っている方が実際にいらっしやるので、これであればタイトルも良い。 時間配分だが、60分はできる限りキープしたいと感じていて、組み合わせ講座が素敵なのは本当にわかるが、できるだけ話す時間もキープできたらと毎回思う。それから、前回話が出た、「ねらいは伝えない」とすることに関して、どうか。
森田委員長	ファシリテーターについての文言について、検討する。 50、65、75分といろいろな時間の目安があるが。
西川副委員長	もう一つ、「まとめる」を入れるかどうかというところも。ファシリテーター的には、会議の結論を皆で確認するというパターンのまとめるも、まとめるという言葉ではあるが、この中ではいらないのでは。
森田委員長	動詞にするのはどうか。

西川副委員長	「などを通じて」を入れてはどうか。
森田委員長	「などを通じて」を入れる。
丹野委員	<p>ワーク2「あなたにとって子育てとは」のワークシートでは「私たちにとって」を「私にとって」と変更しているが、マニュアルのねらいや、展開、備考欄には夫婦という言葉が結構出てきて、家族像の多様性を認めるという立場に立つならば、夫婦という言葉には検討が必要ではないか。</p> <p>また、ワーク3の「子育て今昔ものがたり」は視点としてはとても面白いと思うが、文化の違いはあれど、そこまで子育て感の違う世代の人が集まる、という実態はないのではないかな。</p>
長谷川委員	<p>3歳児神話に関しては、削除の意見もあったが、世代間の違いを考えるものが一つあった方が全体的に良いのではないかとということで。ワークとして、おじいちゃん、おばあちゃんにこう言われたという話のきっかけとなるには、いいのではないかな。</p>
本山社会教育指導員	<p>そこまで世代差のある人が参加されるかという質問については、必ずしも世代差が大きい人たちが参加しているわけではなく、同じ世代の親同士の話し合いの中でも、世代差がある周りの人から言われたことで、話してもらおうということ。自分の親には言われなくても、たとえば、助産師さんから言われたという方もいらっしゃって。今、孫育て講座などもあるので。</p>
丹野委員	<p>3歳児神話には是非があるというお話だが、3歳児神話に縛られている人も、考えるきっかけを残しておくことは大事。このプログラムが地域の人と繋がっていけるような、そういうビジョンを持っているというのが、すごく面白い。それこそ孫育て講座と一緒に何か連動するとか、連続講座で交流してみようとか、もう少し、魅力あるものにしたい。今具体的なアイディアはないが、そのコンセプトはねらいの中に残しておいて良いかと思う。</p>
森田委員長	<p>「今昔」の言葉は引がかかる。今のお母さん同士でも、親はそばにいた方がいいとすごく言うお母さん、そうではないお母さんというように、すごく価値観が違う。今昔とすると、祖父母など世代間の違いに限定的。世代で分けるタイトルでなくてもいいのではないかな。子育ていろいろとか。</p> <p>また、「驚いてしまったあなたはどんな気持ちになりましたか。何か発言しましたか」という問いは、いらないのでは。事例があって、それについてどう思うか、という形でどうか。</p>
田中委員	<p>ワーク2のところで、「夫婦」という言葉が、という指摘があったが、保護者や保護者同士、保護者が互いに、という言葉はどうか。子育てするのは夫婦とは限らなくて、おじいちゃんやおばあちゃんも大活躍されているので。</p>

	<p>また、ワーク5の「スマホの使い方どうしてる？」についても、スマホに限らず、今後情報機器になっていくと思うので、スマホと限定しなくても良いのでは。</p>
丹野委員	<p>田中委員の意見は、ワーク2「子育ては共にしていくものだという」ことを改めて認識し、子育てに関する思いを共有する」とのねらいにも合っている。</p>
森田委員長	<p>「自分の気持ちや考えを話すことで、相手が思っていたことを知る」というところまで、ねらいとして入れるか。</p>
岡事業・企画係主事	<p>確認したところ、カットを検討していた部分を追加してしまった。「夫婦～」以下の文章は削除として再度検討いただきたい。</p>
森田委員長	<p>備考欄に夫婦参加の場合は、これ使ってお互いにそれぞれの考えを共有するということが書いてある。P17の対象がパパ&ママになっているワークの全ての備考に記載されている内容ではない。</p>
西川副委員長	<p>夫婦で参加して、同じ問いをすることは、ねらいと連動している。ただ、バリエーションとして、夫婦で、という考えでいいのかどうかというところ。</p>
田中委員	<p>夫婦で一緒に参加の時も、夫婦で話すという展開にしないで、他の参加者と同じようにテーブルごとに話してもらって、発表して共有して、深めていくという形。実際にワークを見せ合う等の話はご自宅で、という流れになりやすい。</p>
森田委員長	<p>全員が夫婦両方そろって参加することはあまりない現状からすると、備考欄の夫婦に関する記載は、夫婦で来ている人は夫婦でやるという話になり、逆に使用しづらい、と。</p>
長谷川委員	<p>現行のプログラムでは「進め方のポイント」として進め方の中枢にあったところを、備考欄への記載に変更した。</p>
森田委員長	<p>メインのところは外したほうが良いという判断での備考への変更であるが、実際現場としては多分それも難しい状況である。</p>
田中委員	<p>ワーク21のように、パパ・ママ両方を対象とする時だと使用しやすい。</p>
森田委員長	<p>夫婦ごとにおしゃべりして自由に考えを共有するのは現状難しいので、備考はカットして良いのでは。</p> <p>また、「ねらいは伝えない」とする部分については、9ページ『「親の学習」に参加する方へ伝えること』を伝える、ということでいかがか。「ねらいは伝えない」とすることで、それに縛られ、何も伝えてはいけない、何も言うてはいけないという誤解を招いていた。その誤解をとくためにも、ちゃんと書いてあるところを参照してください、と。</p>
西川副委員長	<p>今日のテーマはこれで、やり方がこれ、ということはもちろん伝えられると思うが、その結果、こういう結果になってもらいたいという</p>

	<p>ことに関しては、伝えないほうがいい場合も結構あるので、その区別ができればいいのではないかと。環境設定をする場だから、結論を言ってしまうと、学校の先生と一緒に、要するに付度してこの答えが正しいということを促すことになりがちだということから、</p> <p>「ねらいは伝えない」と書いたのでは。それを、そのテーマすら全く言わない、呼びかけすらしないと捉えられてしまっていた。素材を出して、みんなで、これはこう思う、けれどこちらの意見も今から言うねと言って自分の意見を言う、そうやってはっきり区別がつくように伝えてあげると意見になる。ただし、講師の意見はすごく強いので、どういうふうにとどこまで出すか、ファシリテーターと講師が兼務するとき、すごく難しい。こう言っているけれど、みんなどう思う？というふうにやった方が、みんなの考えだから、そこで今から自分の意見を言うから、と言っても、受け止めはみんなの自由で、ということに成立する。</p>
森田委員長	<p>ワーク5「スマホの使い方どうしてる？」は、スマホに限定しないほうがいいのではないかとという意見がでたが事務局で検討いただくこととして、次にワーク6からワーク10について、ワーク10、11、12、13は一つのワークに。ワーク8「子どものトラブルどうしてる？」はワーク4、ワーク6と似ているため削除する案、子どもに関するトラブルはデリケートな部分が多くトラブルの当事者が講座参加者になる可能性をはらんでいるため、子ども同士の軽い問題や悩み事を話し合うプログラムとして修正する案、タイトルについて「子どものトラブル」を「子ども同士のトラブル」と言い換えたり、「ママ友のつき合いどうしてる？」と変更する案が出ている。アンケートでは保持意見が多いため、保持の上で修正がいいと考えるが、修正方法について意見を伺いたい。</p>
長谷川委員	<p>公園でこういう経験があって、皆さんどうしていますか、というのが、あるあるで出たり、こんなときはどうしたらいいのかという話として出るので、わざわざワークとしていれなくても良いかと思う。あるあるの中の項目としてのもので十分ではないか。</p>
森田委員長	<p>もしこれをワークとして行うのであれば、最初に話し合う事例が提示されて、それについて話す中で自分の事例が話される方が安全かもしれない。ゼロから事例を出すとなると危険が伴う。そうすると、ワーク6のような形が安全かもしれない。ワーク8は削除の方向で良いか。</p>
西川副委員長	<p>トラブルの問題って、育成支援の立場からすると、子どもはトラブルがないと成長しない。けんかをしてぶった、ぶたれたと葛藤する。その葛藤の時間が成長の時間なので、子どもの成長を保障するという視点からすると、本当は親に学んでもらいたい。私として</p>

	<p>は、しゃべってもらいたいだけでなく、これは学んで欲しいと言いたいぐらい。本来みんな経験してきているのに、全然言語化できていないので、今の子どもたちの保障としてワークに入れることも一つ。ただ、出すのであれば子どもの視点ぐらいまで出さないと。親の気持ちがたまっていて、おしゃべりしましょうということだと、トラブルを回避したい、で終わってしまう。本来はそこだけの問題ではない。親同士が話すとき親の気持ちは話せるが、昔は「怪我なんか当然でしょう」という親がいっぱいいた。両方の意見が話されると、どっちなのだろうといううちに、考える大人の都合だけで話が進むということがある。それに関しては適切な資料が必要になってくるし、それがないと深められない。</p>
森田委員長	<p>ワーク6であれば、りゅうくんの気持ちとして子どもの気持ちについて考えるワークがあるので、ワーク8よりもむしろそちらの方が良いかと思う。</p>
長谷川委員	<p>ファシリテーターになった立場で、この話が難しくなってくると戸惑ってしまうことに繋がる。</p>
丹野委員	<p>アンケートのワーク8を保持する意見の中に、子どもの迷惑にはどのようなものがあるかということで、発達段階を知ること、学ぶことが大事なのではないかという意見がある。親からすれば子どもが何かトラブルを起こした時に何もしていないと、親として責められるのではないかと、そういうプレッシャーって誰も何も言ってないが感じとっている。そういう社会の空気があるのではないかと考えていて、子どものトラブルをどうにかして解消したいとか、起こさないようにしたいとか、対処したい、うまく対応したいという思いはあると思う。ただ、子どもってトラブルを起こすもの、大人だってそう。その前提を気づく、もう一度、その前提に立つ意識を持つことが今すごく大変なこと。それをどう、このワーク中に落とし込むのかはとても難しいが、ただトラブルを回避しようという方向にいとってしまうと、ファシリテーターの人たちが、専門家とか違う立場になってしまう。</p>
森田委員長	<p>ワーク8は削除の方向で。資料は偉い先生のいいことが書いてあるが、ファシリテーターが使用して先生になってしまう危険がある。</p>
丹野委員	<p>ワーク6に、トラブルは起こるもの、起こすもの。未然に防ぐものではなく、皆さんもそうでしたよね、ということを一言入れる。その根拠がどうこうということではなく、それを前提に立ちましようということはこのプログラムの中で示す。</p>
森田委員長	<p>ワーク6のねらいには、トラブルを回避するとは書いてないが、どうしてもエピソードからそういう流れにはなりそうなので、子</p>

	もにとってトラブルは必要なことで、みんなで見守っていく必要があることを入れる。
西川副委員長	ワーク6の資料は、子どもの視点から、こういうのもありますよ、という、ここにいない人からの視点を入れておくというための資料。もう一つの手段として資料を提示する。深まりは、ファシリテーターの使い方次第。
森田委員長	ワーク6の資料は「次のコラムを読んで自由に話し合いました」となっているが、展開の中にはこの資料について話し合う時間がない。もし資料を残すなら、配布用とか、限定する。 次に、ワーク19「イライラの解消どうしてる？」まで、いかがか。ワーク10はパパという限定を外して誰でも使えるプログラムとなった。ねらいの「パパ同士・ママ同士で行うと意見が出やすかったり、違った意見が出たりする」という文言は、ねらいではないので、入れるところが違う。それから、ワークの自慢話という、きっかけになっているようなワードだが、実際やっているかどうか。
田中委員	自慢話と聞くと引いてしまう人もいるので、お子さんの頑張っているところはどんなところですか、というふうに聞いている。
森田委員長	「最近あった褒めてあげたい出来事」に変えている意図は。
伏見（怜）社会教育指導員	自慢話という抵抗のある人もいる、ということで、最近あった褒めてあげたい出来事としたが、一方で、他では自慢話をするのができないからあえて自慢話が良かったという意見もあったため、このような形となった。
丹野委員	ここで引き出したい、問いのねらいは何か。
伏見（怜）社会教育指導員	話しやすさ。会話の最初に何かあった方が良く、ということと、和ませる雰囲気も含めてのこと。実際に何度かこのワークを行ったファシリテーターの方が、この進め方をして話が盛り上がったという話を聞いた。
西川副委員長	多分、今日は自分の子どもについて話しますよ、しゃべりますよ、なので肯定的な質問から入りましょうということでこの問いがあるとすれば、自慢話を自慢しちゃうとみんな熱くなる。うちの子は100点とりましたとか。なので、問いとして出すのなら、自分の子どもの好きなお話や、褒めてあげたい話とか。 駄目ではないが、こんなことができましたという自慢話を、周りが聞いて楽しいかというところ。気の利いたお母さんだと、昨日うちの子もこんなばかなこと言ったんです、と自慢話をしてくれる人がいるとOKだが。その気の利いたお母さんがいるかないかで全然違う雰囲気ができてしまうのではないかと。問いとして、汎用性があるかどうか。

森田委員長	<p>組み合わせ講座の場合、導入は不要というコメントは、全般に関わってくる。</p> <p>ワーク14の「みんなでお出かけマップをつくろう！」を統合するのはとてもいい。備考のところにある公民館職員は避難所、AEDの確認というのは、何のことか。</p>
岩崎館長	<p>ワーク14は何回かやったことがある。その時に、ランチ情報や病院というのが話題の主流、これから社会教育の場も生きる力、生きるための命を守る社会教育という部分で、災害について考えていかななくてはならないので、少し重くなってしまうと思うが、わいわいしている中で、避難所ってどこかわかりますか、AEDってどこにあるかわかりますか、と、無理やり言うのではなく、公民館職員がその地域を知っているので、避難所の場所を下調べしておいて、示してあげる。やはり去年、小さなお子さんを抱えて、不安だった方もいると思い、防災に重点を置いているママもいらっしやると思うので。今後こういう視点が必要になってくるので、参加者がわかれば一番いいが、なかなか話題に出ないので、公民館職員がある程度地域のことを知っておいて、参加者に共有して、生きる力をつけていくようなおしゃべりマップに繋がっていけばいいという思い。</p>
森田委員長	<p>備考に書いてしまうと必ずそうしましよとなるので、公民館職員は一応このワーク進行中はファシリテーターに任せる。とても大事な事だと思うが、60分のワークの中でそれが入ってくるのは進行上難しい。</p>
岩崎館長	<p>公民館職員がその場で言うというわけではなく、事前に調べておいて、ファシリさんとの事前の打ち合わせで、そういう防災の視点を入れてのマップにしませんか、とか、そういう話が出なかったときはこんなのもありますよと、資料として持っている、アレンジの一つとして確認しておいたらいかがかという提案であり、絶対ここでという意味ではない。</p>
森田委員長	<p>そうするとここに書き込むことはしないで、ケースによってということの方が良い。これを入れることで、ねらいにもそのことが入ってくる。60分でわいわい、あそこに行った、ここに行ったという話で盛り上がる、おしゃべりしやすい雰囲気のところ、反対にこういうものは水を差すみたい。時によっては、ないわけではないが。</p>
伏見(怜)社会教育指導員	<p>初めて担当するファシリテーターや職員がワークを選ぶ際の参考となるアドバイスを書く場所がなく、備考やねらいに書いているものが多々あると思う。</p>
西川副委員長	<p>プログラムをどう使うかについては、どんどん変えていいと思う。オーソドックスであるから変えられるので、テーマを出してお</p>

	く意味はある。定番で出しておくということで、バリエーションがあり、やり方の説明ではなく、こんなこともできるという、参考くらいの書き方ができる。
長谷川委員	担当するファシリテーターも、地域の違うエリアに行く時もあるので、プラスαの資料、知識としてあるといい。
西川副委員長	地域の地図を渡してワークをしてもらうのであれば、最初から印をつけて、この印何だと思いませんか、実は、という使い方もできる。このワークのねらいはおしゃべりをして仲間を作ることと、地域情報をお互いに学ぶことの両方。仲良くなっていくということなら、普段どう過ごしているかという話の中に、その人の人柄や、暮らしぶりが見えてくることのほうが大事。
森田委員長	マニュアルにある進め方は、シンプルにしておいたほうがいいと思う。もう1度、改訂研修の皆さんのところで、よりシンプルな形で見直してもらう作業をお願いしたい。
長谷川委員	初めて担当するファシリテーターが見てもわかりやすいもの。
丹野委員	話が戻るが、ワーク4の「あるあるアンケート」は質問自体が資料の中に入っている。
森田委員長	資料を残しておくべきか。
長谷川委員	かなり古い資料であれば、内容を改善してもいい。
森田委員長	そのあたりは作業をお任せする。また、資料もパパ編、ママ編は分けなくていいのでは。
西川副委員長	働くお母さんも増えているし。
長谷川委員	パパ編、ママ編を統合するか別々がいいか、内容を検討する。
森田委員長	育休の云々も、あるあるに入ってくる。アイデアを改訂研修の皆さんにお願いしたい。また、ワーク18のワークシートで使用しているグラフの出典が古いという意見があるが、このグラフで何か、滞りや差し支えが出てきているということか。
岩崎館長	ワーク18について、現行のワークのねらいが、「すべきこと・したいことを選びとり、行動し、自分のベストバランスを実現していく」となっていて、厳しいのではないかとということで文言を変更した。グラフについて、特に支障というわけではないが、出典が2007年ということで、その頃のワークライフバランスの指標でどうか、というところを委員にお聞きしたい。
森田委員長	ねらいが柔らかくなったことはすごく良い。グラフについては、運用上あまり問題なければこのままで。
西川副委員長	ワーク15は「一緒に絵本を読もう！」としているが、ねらいは、親子の触れ合いの大切さの再確認。
森田委員長	ねらいの「絵本に詳しくなる」をカットし、学ぶわけではないということ。

西川副委員長	本を持ってきて、普段絵本の使い方どうしてる、どんな願いを持っている、とか。おしゃべりをするために、絵本を話のネタにする、と。
長谷川委員	コミュニケーションの時間の大切さを再確認するということで、このワークが活用されているのではないか。きちんと向き合う時間を大切に、と。このワーク名だとやはり本を読むためのワークであるという捉えられ方はすると思う。一般的に、このワークをやると言うと、絵本の話が聞けるのかなというニュアンスにとれるので、ワーク名を変えたほうがいい。
西川副委員長	安心した親の声を聞く、ということが絵本を読むことの主旨でもある。繰り返しになるが、向き合うという、それを学ぶという話になると、さきほどのトラブルがなぜ必要かというような、本当の知識、情報としての学びの時間になっていく。親の学習プログラムに載せるのであれば、絵本がすごくおしゃべりにいいアイテムであるということを出していきうほうが向いているのではないか。
田中委員	子どもに与える本を、何を手にとっていいかわからないという保護者がいらっしゃるの、それぞれが本を持ってきて紹介する、その中で、こういう本が適齢期に合っているとか、いろいろな考えで本を選ぶきっかけになる。
西川副委員長	もし、そのことを学ぶ機会にしたいのであれば、ちゃんと絵本について知っている人を呼んでくる。
森田委員長	このワークのねらいは、親子のコミュニケーション、向き合う時間の大切さを認識することで、絵本を上手く読むことではないという視点で改訂研修の皆さんに再考いただく。 最後のワークまで届かなかったが、皆さん率直なご意見いただきありがとうございました。

9 その他

次回は、令和3年3月5日（金）午後2時00分より生涯学習総合センター7階講座室1・2にて、開催予定であることを確認した。

10 閉会